

学習指導要領から考える、読むことの授業づくり

広島大学 難波博孝

1 はじめに-本論の趣旨-

本論文は、学習指導要領から授業をどのように作っていくかについて考えるものであるとともに、今回の雑誌「国語科授業論叢第3号」の新教材についての論文の書き方についての、解説になっている。まず、本論文を執筆するに至った考えについて述べたい。

私は以前から、学校教育現場の人々が（管理職や一般教員だけではなく、教育委員会の関係者なども含めて）学習指導要領を文言は知っていたり覚えていたりしても、理解していないのではないかと考えていた。例えば、学習指導要領国語編の中学年の読むことの指導事項の（ア）に、「内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること」とある。校内研修などで、「中学年の説明文の音読では、この（ア）のように、中心がよくわかるように音読すればいいですね。ですから、文章の中心段落や、段落の中心文はみんなで読み、それ以外は、教員が読むようにすれば、中心がよくわかりますね」などと私が発言すると、「そうなんですか！」「そんな音読していいのですか」とびっくりされてしまう。学習指導要領を普通に読んで普通に実践すればいいと思うのだが、どうも学校現場の人々の思い込み（そのような音読はやったことがないから、やるものではない）は相当強固である。

別の意味で、学習指導要領が理解されていない、あるいは大事にされていない、と考えざるを得ないものがある。国語教育の関係者が執筆する、国語教育関係の学会が作成した教員養成用のテキストである。私は、かつて学会で次のような趣旨の発言を行った。

学会テキストや学会必携の記述は、現行の学習指導要領についても、新しい学習指導要領についても、言及はされていない。したがって、このテキストや必携を読んで授業をしようとするのなら、教育現場の教員は（ここには大学教員も含まれる）自分で、学習指導要領との関連づけを行わなければならない。学習指導要領は、ナショナルカリキュラムであり、それらに対してどのような立場にいるのか、いるべきなのかについて、公共的に語るべきなのが、これらの書物ではないだろうか。

要するに、学習指導要領について言及することなく、研究者がそれぞれの関心で執筆しており、「公共」的に書かれていないのである。

学習指導要領は、日本の教育において公共性を担保するものである。完全なものなどこの世にはないのであるから、学習指導要領が完全無欠であるとはもちろん言えないし、また、学習指導要領という国家が決めたもので教育がなされるのはおかしいという考え方もあるだろう。しかし、たとえ学習指導要領に欠陥があったとしても、まずは学習指導要領を理解し、その欠陥をみんなで補い、次回の改訂の意見として表明すればいいのである。後者の考えを持つ人でも、まったくこのようなガイドラインが必要でないと考えているわけではなく、地域や学校のガイドラインは必要と考えているだろう。少なくとも教員個人個人がばらばらでは、研究者個人個人がばらばらでは、教育の公共性は担保されないからである。

学習指導要領は、しっかり理解されないまま、やみくもにその文言だけを覚えたり逆に反対したりするものになっていたのではないだろうか。

私は現在、教育現場の人々と、学習指導要領をしっかり読んだ上で、授業を作る活動を行っている。しっかり読んで授業を作ろうとすると、学習指導要領はいろいろなヒントをくれる書物であることが見えてくる。一方で、問題や欠陥も見えてくる。そのように、学習指導要領をしっかり使いこなすことで、学習指導要領そのものではなく、学習指導要領を使いこなす人々の中に「公共性」が生まれてくるのだと考えている。

それでは、具体的にどのように学習指導要領を使いこなせばいいのだろうか。以後では、短い教材を使って、読むことの授業を例にして、説明していきたい。

2. 学習指導要領からの授業づくり

私は、授業を作る上で書かせない構成要素として、以下のものを必須と考えている。

- ・教材
- ・学習目標（態度目標／価値目標／技能目標）
- ・言語活動／活動目標
- ・手だて（授業方法）

以下でくわしく述べていく。

（1）教材

ここで取り上げる教材は、昨年度まで学校図書の3年上で使われていた「とんぼのひみつ」という教材である。中学年の特徴がよく現れた、また短い教材なので、これを例としたい。まず全文を掲載する。

とんぼのひみつ

- ① 夏から秋にかけて、あちらこちらの水辺でたくさんのとんぼを見かけます。わたしたちにとって、とんぼはとても身近なこん虫です。
- ② ところで、そのとんぼたちが、いろいろなひみつをもっているのを知っていますか。
- ③ まず、一つめのひみつは、そのしゅるいがとても多いことです。日本には、およそ二百しゅるい、世界には、なんとやく五千しゅるいものとんぼが生きています。
- ④ 二つめのひみつは、とても古くから地球にすんでいることです。とんぼのそ先が生まれたのは、やく三億年前です。日本には、ムカシトンボというめずらしいとんぼがいます。このとんぼは「生きた化石」とよばれています。一億五千万年ほど前に生きていたとんぼによくにているからです。
- ⑤ 三つめのひみつは、そのとび方です。四まいの羽をじょうずに動かして、時速百キロメートルものスピードを出したり、バックやちゅうがえりをしたりすることもできます。
- ⑥ このように、身近なとんぼにも意外と知られていないことがあります。同じ地球にすむなか間としては、人間よりもずっと先ばいのとんぼには、まだまだわたしたちの知らないたくさんのひみつがかくされているかもしれません。

以後は、この教材を基に、実際の授業づくりを考えていく。

（2）学習目標（態度目標／価値目標／技能目標）

次に、学習目標について考える。国語科の授業づくりにおいては、学習目標の設定が最も重要である。学習目標は先に触れたように、その授業や単元でつけるべき力を表すものである。この学習目標を私は、三つに分けて考えている。

一つ目は、態度目標である。少し前の言葉では、新学力観に基づく学力、といってもいいだろう。（このように流行語が生まれては消えていくところも、現在の教育に公共性が薄い証拠である）。興味や関心、態度に関する目標が、態度目標である。態度目標は、その教材や設定しようとする言語活動、あるいは学習目標の興味や関心、態度形成がどれだけできるかという目標である。この態度目標形成ができなければ、以後の学習目標の達成はおぼつかないだろう。したがって、単元の最初で、態度目標の形成が図られなければならない。小学校低中学年において、いきなり教材の指名音読から入ることは、態度目標形成を怠ったまま授業していると言わなければならない。

二つ目は、価値目標である。価値目標とは、価値観にかかわる目標であり、言い換えれば、ものの見方や考え方、認識といったことにかかわる目標である。「考え」や「知識」「技能」そのものではなく、それらを支えている価値観、メタ認知、信念、そういったことにかかわる目標と言ってもいい。私は、教育においては、ある方向に価値観をもっていくのではなく、さまざまな価値観をできるだけ深く伝えていくことが重

要だと考えている。学習者が自ら自分の価値観を選び取っていくようにするために、学校ではできるだけ多様な価値観をその背景も含めて深く伝えていきたいのである。

学習指導要領における、読むことの指導事項では、この価値目標に関わる事項として、(オ)という項目がある。(オ)は、「経験(低学年)」「感じ方(中学年)」「考え(低学年・高学年)」といった言葉で、表現されていることを、最終的には「広げたり深めたりする(高学年)」ということをおねらっている。読むことの学習を通して、このような価値観・認識に関わる学習ができるように設定していることは、この学習指導要領の長所であると言えよう。

ただ、(オ)には、何についての価値観や認識を深めるかについては、明確にしていない。これは、教材によって変わってくるところではあるが、手がかりになるものが欲しいところである。この参考になるのが、道徳の学習指導要領である。今回の学習指導要領では、教科と道徳の関係を密接に行うことが求められている。扱いを慎重にしなくては行けない部分ではあるが、例えば文学の授業を行っている時、「道徳の授業になっている」と非難されるようなことがあった教員にとっては、朗報であると言えよう。文学教材の授業を深く扱えば、人物や筆者、読者である自分、友人たちや教師、それぞれの人々の「生き方」に触れざるを得ない。そのような授業は、従来では「それは国語科ではない道徳だ」と言われてきたが、今後は、胸を張って「道徳との連携を図った国語科の授業です」と言えるのである。

読むことの学習目標のうち、価値目標については、読むことの指導事項の(オ)と道徳の学習指導要領を参考にしつつ、教材や学習者の実態などを考え合わせて設定することになる。

三つ目は、技能目標である。これは、読むことの技能であり、学習指導要領の読むことの指導事項のほとんどが、この技能目標設定の参考になる。2011年度から実施された学習指導要領では、読むことの指導事項は、「音読」「効果的な読み方(高学年のみ)」「説明文」「文学」「考えの形成、交流」「読書」となっている。実際の技能目標設定の際には、まず学習指導要領の指導事項をみて、それを参照しつつ、教材や学習者の実態に合わせて書き換え、また、いくつかの事項から重点化して設定する必要があるだろう。

また、学習指導要領の指導事項以外に、技能目標を設定することもある。学習指導要領はあくまでもミニマムエッセンシャルズであるから、学習者や地域、学校の実態や個性、教師の考え方などから、加えるべき技能目標もあるはずである。たとえば、学習指導要領には、「論理」「読みの視点」「転換」「クライマックス」といった用語は見当たらない。教師は、必要に応じてこのような用語に関わる技能目標を設定することができるのである。

それでは、以上のような学習目標の説明に立って、具体的な教材に即して、学習目標設定の仕方を見ていこう。

まず、態度目標を考える。この教材「とんぼのひみつ」を使った単元では、後で述べるが「生きもの一枚ひみつポスターを作る」という言語活動を考えている。そこで、態度目標としては、「とんぼなどのいきものひみつに関心を持つ」としてみよう。もちろんここで、「とんぼのひみつに関心を持つ」と、教材そのものへ態度目標設定も考えられる。

次に、価値目標を考える。中学年の読むことの指導事項には、「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。」とある。そこで、何についての感じ方の違いでやるか考えるための参考として、道徳の学習指導要領の中学年をみると、3「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」の(2)に、「自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切に。」とある。これらを参考にして、価値目標として「生き物の不思議さに感動し、自然を大切にすることを育てるとともに、友達との違いに気づく」と設定してみよう。友人と自分とどちらも生き物の不思議さに感動するのではあるが、その感動のポイントが違ったり対象とする生き物が違ったりすることに気づくのである。

最後に、技能目標について考えてみよう。まず、中学年の読むことの指導事項に挙っているものを見てみる。次に教材や学習者の実態に即してその指導事項を書き直してみよう。その上で、重点項目を決め、◎を付けてみることにする。さらに、指導要領に掲載されていない技能目標について考えてみよう。以上のことを検討した結果を表にまとめたのが以下のものである。

「とんぼのひみつ」を使った単元の技能目標

	学習指導要領の指導事項	単元に即した目標	重点◎
音読	内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。	内容の中心がよく分かるように音読する	
説明文の解釈	目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。	目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を読む	◎
考えの形成	目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。	目的や必要に応じて、文章の要点に注意しながら読み、文章を引用する	
読書	目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。	目的に応じて、図鑑を読む	
+α		概観（中心）と詳細の関係をとらえる	

まず、音読については、教材が説明文なのでそれに合わせて改変した。次に説明文の解釈については、この教材が意見文ではないことを考え改変している。なお、この教材「とんぼのひみつ」は、「はじめ」でとんぼのひみつについて問題提起があり、「なか」で三つのひみつが列挙され、「おわり」で「このように」でまとめている、典型的な「一般-具体」型の、中学年によくある説明文である。また、「なか」の段落では、それぞれの段落の最初の一文が、その段落の「概観」を表す中心文（トピックセンテンス）であり段落の残りの部分は、「詳細」となっている。つまり、教材文全体の段落相互の関係は「一般-具体」型、「なか」の各段落は「概観-詳細」型となっているのである。したがって、読むことの授業では、中心となる語を題名から見つけ（「とんぼ」「ひみつ」）、その語を頼りに「なか」の段落の中心文を見つけ、「なか」の段落がどのようにして「おわり」の段落でまとめられているかを考えることになる。

考えの形成については、「なか」の段落の中心文を取り出すこと（引用）、それらを並べて各段落の要点とすることなどが目標となるだろう。さらに、学習指導要領にはない+αの学習目標として、先に述べた、「なか」の段落中の構造、つまり、「概観-詳細」型の構造をとらえることを掲げた。学習指導要領では、段落相互の関係については言及があるが、段落内部の構造については言及がない一方で、この教材では「なか」の構造が重要なので、+αの学習目標としたのである。これで、学習目標ができたことになる。

(3) 言語活動／活動目標

次に、言語活動／活動目標である。周知のように、今回の学習指導要領では、言語活動が全面的に内容に取り入れられた。しかし、言語で活動すれば、なんでも言語活動になるのかというと、それは今回の改訂の趣旨とは異なっている。

言語活動について、学習指導要領の総則には、

各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

と、ある。このことをまとめると以下ようになる。

(言語活動に必要な要素)

- 教科における、基礎的・基本的な知識技能の確実な習得や活用に働くこと

- 課題を解決するものであること
- 思考力、判断力、表現力をはぐくむものであること
- 主体的な学習に取り組む態度を養うものであること
- 個性を生かす教育の充実にはたらくものであること

言語活動とは単なる言語の活動ではなく、上のような要素を含むものではなくてはならないのである、つきつめていえば、「学習者が自ら課題をもって主体的に取り組む中で、思考力や判断力、表現力を使いながら、教科の知識や技能を使わせしっかり定着させる活動」と言えるだろう。

私は、上に挙げられた「課題」という言葉について、以前から「活動目標」という言葉で表現している。言語活動は、学習者が「活動目標」に向かって主体的に取り組む中で、基礎的な知識などを使い、また、思考力などを駆使するのである。例えば、「たんぼぼ」あるいは「たんぼぼのちえ」といった教材の授業で、学習者が「たんぼぼ紙芝居を作ろう」としているとき、「たんぼぼ紙芝居を作る」ことが「活動目標」となり、その作る過程が、言語活動となる。

ここで注意しなければならないことについて、2点述べる。まず1点目は、「学習目標」と「活動目標」は異なるものである、ということである。「学習目標」は、知識や技能、ものの見方や考え方など、その授業や単元で付けたい力であり、つまり<目的>である。それに対して、「活動目標」は、言語活動という<手段>の完成形を示したものである。先ほどの例で言えば、「たんぼぼ紙芝居」がいくらすばらしくできても、それは「活動目標」を達成しただけであり、「学習目標」が達成できたとは言えない。「たんぼぼ紙芝居」づくりを通して、たとえば、「教材の順序性が理解できた」という学習目標が達成できなければ、授業が成功したとは言えないのである。

2点目は、「活動目標」は、発展のための目標ではない、ということである。以前の授業では、読むことの授業をしたあと、発展学習として書くことや話す聞くことの活動をしたことがある。しかし、それらの発展としての活動は、読むことの授業としての「言語活動」ではない。読むことの学習目標を達成するための言語活動は、あくまでも、読むことの学習目標を達成するための手段であり、「活動目標」は言語活動の完成する姿を示して学習者に見通しを持たせるものなのである。したがって、読むことの授業をおこなっているそのときにまさしくどのような「活動目標」を持った言語活動がなされているかが問われるのである。

以上のことをふまえて、「とんぼのひみつ」では、どのような言語活動/活動目標を設定すればいいだろうか。ここで、(イ)でみた、学習目標についてまとめたものを挙げる。

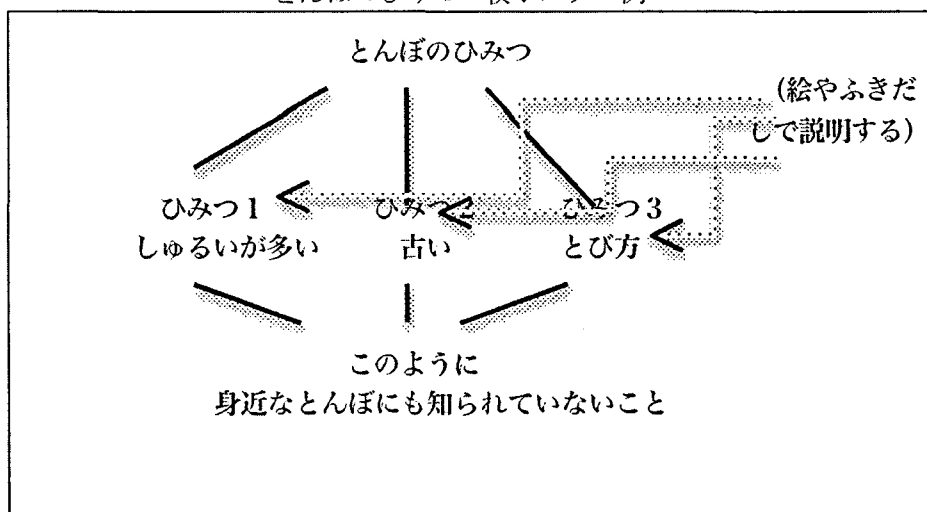
「とんぼのひみつ」を使った単元の学習目標

態度目標	とんぼなどのいきもののひみつに関心を持つ
価値目標	生き物の不思議さに感動し、自然を大切にすることを育てるとともに、友達との違いに気づく
技能目標 (重点と+ αのみ)	目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を読む概観(中心)と詳細の関係をとらえる

これらの目標が達成でき、かつ、学習者が課題(活動目標)に向かって主体的に活動でき、さらに思考力や表現力を発揮できる活動を考えなければならない。

そこで一案として、「生きもの一枚ひみつポスターを作る」という言語活動を設定してみた。この活動は、「とんぼのひみつ」を読みながらその内容を構造化してポスターにまとめ、同じ手法を使って、自分で調べたい生き物の秘密を、同じような構造化したポスターにまとめる、という言語活動である。「とんぼのひみつ」ポスターづくりで、読むことの技能目標の基礎を学び、次の「生きものポスター」では、その基礎を生かして自分なりのポスターを作るのである。この「生きものひみつポスター」は、おおよそ次のような構造になっている。(とんぼの場合)

とんぼのひみつ一枚ポスター例



このような構造のポスターを、「とんぼのひみつ」を読みながらまず作成し、次に、自分の選んだ生き物で作成するのである。このポスター作成により、文章全体の「一般-具体」の構造がわかること、「なか」の段落の中心文を引用して要点として書き出せることなどが実現できるのである。

(4) 手だて (授業方法)

最後に、それぞれの学習目標を達成するために、また言語活動が学習目標を達成できるようにするために、手だてを考える必要がある。単元の次ごとに考えていく。

まず、第一次である。ここでは、態度目標の形成、つまり、「とんぼなどのいきもののひみつに関心を持つ」という目標を達成するための手だてを考えなくてははいけない。そのために、教室に生き物の図鑑を置いておき、児童が手に取って読めるようにしておく。また、生き物の秘密の話や朝の会などでしておく。また、理科の授業でもそのような話をして、興味を高めておく。このような手だてを打った上で、「今からとんぼのひみつって文章を読むのだけど、みんなはとんぼのひみつを知っていたら教えて」などと語りかけ、教材に入る前に、「とんぼのひみつ」について語り合っ教材を読むときには確認になるようにしておきたい。その上で、「いきもののひみつを調べてみんなで交流しよう」と持ちかける。そして、「調べたことをみんなで交流できるようなポスターの作り方をみんなで勉強しよう」と投げかけておく。その上で、自分で調べて発表したい生き物を決めておき、調べておくように伝える。

次に第二次である。ここでは、技能目標の形成の段階である。最初に、「はじめ」「なか」「おわり」を分けておく。そして音読であるが、ここでは漫然と音読させるのではなく、「内容の中心がよく分かるように音読する」ということを達成したい。そのために、教師がまずは範読するのだが、その際「なか」の段落が三つあるのだけど、それぞれの段落のどの文がまとめてある文（中心とか大事というのはむずかしいので、まとめてある文というように命名しておく）を考えながら聞いてほしい、と指示しておく。範読後、「なか」の中心文をペアで確認させ、教室全体でも確認する。その上で、「おわり」と「なか」の中心文を全員で、あとの部分は教師が、音読することで、内容の中心がよく分かるように音読する」ことを達成したい。

この次に、「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を読む」ことを達成するために、まず、児童一人一人に、ポスター用紙を渡す。そこには「○○○の◎◎◎一枚ポスター」とだけ書かれている。次に、○○○と◎◎◎にはいることばを考えさせ、それがそれぞれ中心語であることを確認させる。その上で、このポスターをどんな構造にすればいいかを考えさせる（選択肢にして、たとえば、はじめ-なか1-なか2-なか3-おわり）なのか・・・などから選ばせる）。構造がわかったら、ポスターに線だけを引かせる（先に示したポスター例の、題名以外の文章がない状態）。そして、「はじめ」にはどんな言葉を入れるか（「とんぼのひみつ」）「なか1」・・・にはどんな言葉を入れるかを、文章からできるだけ短く引用するように指示して考えさせ、ポストイットに書かせポスターにはらせる。ここでのポイントは、とにかく短く抜き出させることである。そうすることで、書くことが苦手な児童も授業についていける。そしてペアやグループで、ポストイットを確認させ、確認ができたなら、ポスターに本書きをさせる。「おわり」には、「このように」という接続語とまとめの文を引用

させ書かせる。ここまでができたなら、「なか1～3」の詳細を、絵やふきだしをつかって書き込ませる。ここは児童の自由に任せる。

第三次では、「生き物の不思議さに感動し、自然を大切にすることを育てるとともに、友達との違いに気づく」という価値目標の達成の段階である。ここでは、調べている生き物について、「とんぼのひみつ一枚ポスター」と同じ構造でまとめるように指示する。「はじめ」には、〇〇のひみつ。「おわり」には、「このように身近な〇〇にも知られていないことがあるのです」とし、「なか1～n」には、調べてきた秘密を、できるだけ短い言葉で表現させポスターに書かせる。ここまでを徹底させ、あとの詳しい絵やふきだしによる説明は児童の自由に任せるのである。ポスターづくりではペアやグループで協力しすすめていかせる。できたポスターは、ポスター発表会にしてもいいし、教室や廊下に張っておき、質問がある人にはポストイットで張らせてあとで答えるということをしてもらおう。

以上のような流れはあくまでも一例である。児童の言語活動が主体的にかつ学習目標を達成できるような形に行えるよう、全体指導／ペアやグループの活動／個別活動や個人指導などを組み合わせ、授業を行っていきたい。以上のことを表にまとめておく。(全三時間で考えている)

	学習活動	学習目標
第一次	<p>教室の生き物の図鑑を読んだり、などして生き物の秘密に興味を持つ。</p> <p>教材に入る前に「とんぼのひみつ」について語り合う。</p> <p>「いきものひみつを調べてみんなで交流しよう」というテーマの基に、自分で調べて発表したい生き物を決めておき、調べていく。</p>	<p>(態度目標形成)</p> <p>とんぼなどのいきもののひみつに関心を持つ</p>
第二次	<p>「はじめ」「なか」「おわり」を分けておく。</p> <p>なかで、まとめている文はなにかを考えながら、教師の範読を聞く。</p> <p>範読後、「なか」の中心文を確認しあと、内容の中心がよく分かるように音読する。</p> <p>児童一人一人に、ポスター用紙をもらい、「〇〇〇の◎◎◎一枚ポスター」という題名を考える。</p> <p>ポスターをどんな構造にすればいいかを考える。</p> <p>「はじめ」「なか1」・・・にはどんな言葉を入れるかを、文章からできるだけ短く引用し、ポストイットに書いてポスターに貼る。</p> <p>ペアやグループで、ポストイットを確認し、確認ができれば、ポスターに本書きをする。「おわり」には、「このように」という接続語とまとめの文を引用する。</p> <p>「なか1～3」の詳細を、絵やふきだしをつかって自由に書き込む。</p>	<p>(技能目標形成)</p> <p>内容の中心がよく分かるように音読する</p> <p>目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を読む</p> <p>概観(中心)と詳細の関係をとらえる</p> <p>目的や必要に応じて、文章の要点に注意しながら読み、文章を引用する</p>
第三次	<p>「〇〇のひみつ一枚ポスター」と同じ構造でまとめる。</p> <p>「はじめ」には、〇〇のひみつ。「おわり」には、「このように身近な〇〇にも知られていないことがあるのです」「なか1～n」には、調べてきた秘密を、できるだけ短い言葉で書く。詳しい絵やふきだしによる説明は自由にする。ペアやグループで協力しすすめる。</p> <p>できたポスターは、ポスター発表会や、教室や廊下に張っておき、質問がある人にはポストイットで張らせてあとで答える。</p>	<p>(価値目標形成)</p> <p>生き物の不思議さに感動し、自然を大切にすることを育てるとともに、友達との違いに気づく</p>

※「目的に応じて、図鑑を読む」という目標は、第一次から三次まで一貫して流れている。

3. おわりに

以上のように、学習指導要領を基に単元を構想する方法を考えた。学習指導要領や教科書がミニマムエッセンシャルズとしてある以上、私たちはそれを最大限に生かしたうえで、それを乗り越えていくことが求められている。実践者も研究者も、自分自身の経験や自分自身が選び取った理論をふまえつつ、国語科授業の公共性に向けて、すりあわせをしていかななくてはいけない。そのための土俵として、学習指導要領をせいぜい使っていきたいと思うし、読者の皆さんにもそのように呼びかけていきたい。